

帯津良一・槌田 敦 対談 「気とエントロピー」 (ほたる書房)

長岡造形大学 菅 原 浩

『気とエントロピー』、魅力的な題名である。気の本質についてはいろいろ論じられているが、それが、物理学が言う「熱力学的な死」に逆行する過程であることは疑いない。生命とはエントロピーを捨てることである、とはよく言われることである。この本はそうしたエントロピーという概念によって、帯津良一氏が日頃より言い続けている「生命場」の問題に新たな光を当てようという興味深い対談の結果である。相手は、エントロピー概念を通して、従来のエコロジー思想の一步先を見続けている環境経済学の槌田敦氏である。

章立ては、1. エントロピーと出会う、2. 気とエントロピー、3. 健康とは、病気とは、自然治癒力とは、4. がん治療と気力、5. 人間を丸ごと見るとのこと、6. 研究者の条件——となっている。これを見てもわかるように、単にエントロピーという視点で気を理論的に捉えるだけではなく、ホリスティック医療の現場との関わりが強調されている。

エントロピーを捨て続け、生命を維持するということ。それはつまり、宇宙との循環的サイクルの中で存在していくということである。人間の世界だけで資源を回していく「リサイクル」ではなくて、宇宙全体を系とする「サイクル」の思想。それが、エントロピーというコンセプトから導き出されてくる基本思想のようである。帯津氏は、人間を全体としてみる「ホリスティック医学」とは「場の医学」であると言う。自らを修繕し、自己回復していく自律的な力。これがエントロピーを捨て続ける生命場の働きであり、自己治癒力そのものなのである。場のポテンシャルを高めること、それがホリスティック医学のめざす「癒し」である。

ここから浮かび上がってくるのは、宇宙とは「生命場の重畳」ともいうべきホロニックな全体性の場であるというヴィジョンである。たとえば、ある臓器が分泌する物質は、その臓器にとっては「排泄物」であるが、それは身体というより大きな場においては有用な物質となる。そのように、エントロピーとしてある系が排出するものは、他の系にとっての有用物となり、こうした相互連鎖のネットワークは、

細胞、臓器、身体だけでなく、社会、地球、宇宙などあらゆるレベルを含み込んだ重層する生命の織物となっている。

ここで、「気」は、こうした生命場のもつ情報系として位置づけられようとしている。気とは、場のポテンシャルを高めるものである。対談という形式でもあり、この問題はこれ以上深められてはいないが、ネットワークする場の情報系という視点で気を捉える試みは、今後さらに発展していくことを予感させる。

この本を読んで思うことは、いま日本で浮上しつつある「気」への関心、その医療分野への応用ということ、文明全体に関わる「ホリスティックな世界観」への変革という大きなパラダイム・シフトの一環であるということである。そこで思い出したのが、本書と前後して読んだ、アメリカにおけるホリスティック医学運動のリーダーの一人である、ラリー・ドッシーの新著『医学の再創造』(Larry Dossey, *Reinventing Medicine: Beyond Mind-Body to a New Era of Healing*, Harper SanFrancisco, 1999) である。そこで、以下、この書と対比しつつ少し論じてみたい。

ドッシーは、医療の歴史を三つの時期に分けている。第一期は機械論・唯物論のアプローチであり、第二期は心身相関の医学である。第二期までは「ローカル」なパラダイムの医学である。そして第三期は「ノンローカル」な医療である。第三期では、「心が、個人内および個人間における癒しの要因となる。心は時間や空間のある点に完全に位置づけることができない。心は、時間空間において限界のないものであり、究極的には一つである。遠隔における癒しが可能である。古典的な時空概念、物質-エネルギーの概念によっては記述することができない」(p.19) この考え方は、すでにドッシーが『癒しのことば』(邦訳：春秋社)において発表している、祈りの効果、つまり意識が遠隔地にある身体に及ぼす影響を証明する大量の実証データに基づいている。その要点は、「意識は身体や時空の限界を超えて広がっている『ホリスティックな場』そのもので

ある」というパラダイムである。

このようにドッシーは意識を重視する。意識は物質よりも根源的な要素であるとも示唆するのである。とすると、その意識とは何か。ここでドッシーは、「意識は秩序を与える原理である。意識は、組織化されていない、あるいはランダムなシステムに情報を入れ、高い次元の秩序を創造する」というD・ラディンらの言葉を引用して語っている。別の表現でいえば、これは「情報」を与えるということであり、すなわち「負のエントロピー」を与えるということになる。

とすれば、ドッシーを中心にアメリカにおいて「意識」として語られているものと、日本において「気」という概念で現れつつある世界観は、根本的に近いものだという印象を強く抱かざるを得ないのである。ドッシーだけではなく、欧米においては他にもノーベル賞物理学者のブライアン・ジョセフソンなど多くの学者が、意識は物質に還元されえないホリスティックな宇宙の基本的な性質であるという見方を提示している。このような「意識のノンローカル性」という視点から「気」を眺め直してみることも有益であろうと思われる。つまり、「気」とは遍在する意識のもつ性質であるという見方である。そうすることによって、遠隔治療や祈りの効果、また理性を超えた直感力の開発などを含めた、より総合的なホリスティック医学の体系を思い描くことが可能になるであろう。

C.G.ユングは、心についてのノンローカルな見方の先駆者であった。いま、詳しく論証するだけの余裕はないが、彼は、宇宙とは「心的エネルギー」(意識とエネルギーという二つの側面をもつもの)の超時空的、すなわちノンローカルな拡がりであるというイメージを持っていたようである。そうした無限定な場から「秩序化」が発生して、心(正確に言えば心の内容物)や物の世界が生成する、という直観があったことは、書簡などからうかがうことができる。このユングの世界感覚が「気」の世界観と極めて近いということは、すでに人体科学会においても指摘されている。ユングにおいては、そうした世界観を支えるものとして共時性についての経験事例があったにすぎない。しかし今、ドッシーが紹介しているように、意識のノンローカルな性質を示す研究データは圧倒的な量となりつつある。こうした新しいデータをふまえて、ノンローカルなパラダイム

をさらに精練させていくことが求められているのである。それは、単に心理療法という枠内のみの問題ではない。

さて、『気とエントロピー』で示唆されているもう一つの問題がある。それは、生命場といわれる意識＝情報系は、究極的には一なるものでありつつ、かつ個々の人間や、他の生物などすべての生体にそれ固有の自己修復する情報系が存在しており、それが相互連鎖しているということである。自己完結している生命場は一つもないということになる。

ここで私は「階層化し連鎖しているホロン」という見方を導入することが有効であるとする。これは、アーサー・ケストラーが提唱し、現在はケン・ウィルバーによって理論化されている見方である。ここでいうホロンを、それぞれの秩序化の次元における情報場であると見なすことができる。そのホロンが多次的に重畳しているのが宇宙だという見方である。

さまざまなホロン＝情報場は、生成した消滅している。ホリスティック医療に話を戻せば、帯津氏が語っている、「癒しをサポートする場の創造」もまた、一つのホロンの生成なのである。その場自体は、それを構成する個の意識を超えた生命を持つのだ。これは言い換えれば、汎生命的な世界観だとも言える。

最後に、帯津氏がホリスティック医療の行き着くところとして語っている、スピリチュアルな要素というテーマがある。帯津氏は、「宇宙の意志」に言及して、語っている。「ビックバンの前から私の場はあった。それがこの地球へきたのは、私の場のポテンシャルみたいなものがだんだん落ちてきて、力不足でもうふるさとに帰れなくなったために、鳥が木の枝にとまるように、この地球で肉体が与えられた。そこで70年あるいは80年かかって自分の努力で場のポテンシャルを上げなさいと。ポテンシャルが上がってその勢いで、肉体が減びたときに魂のふるさとみたいなものに帰っていくんじゃないかと」(p.181-2)

この言葉は何ら突飛なものではない。これは、意識のノンローカル性に立つ「第三期医療」において極めて自然に出てくる感性である。ノンローカル・パラダイムは、意識が究極においては一であり、私たちの意識もその一部であるという立場に立つ。その全一性の場から分離して、個別であるかのような

意識場が相対的存在として一定期間存続しているの
である。そして「場のポテンシャルを上げる」とい
うのはどういうことであろうか。ポテンシャルが高
いというのは、明らかに、より全一性に近い状態を
表している。つまり、個別性をもつホロンとしての
存在は、究極的な全一性の場に回帰しようとする衝
動を内在させている。ウィルバーが論ずるように、
ホロンは自己超越しようとする傾向を本来的に持つ

ているのである。「スピリチュアル」というのは、
この全一性の意識場に向かつての私たちの旅路に関
係しているのかもしれない。生きるということをそ
のような枠組で捉え、その中に医療を位置づけてい
くこと、それがホリスティック医療だと言うことも
できよう。そこでは、死は終わりではなく、より大
きなプロセスの一過程にほかならない。帯津氏の探
求は、そのような地点まで到達したようである。

町 好雄 著「気を科学する」・「気は脳の科学」(東京電気大学出版局)

電子技術総合研究所 野 村 晴 彦

<著作に事寄せて>

現代は、誠に物騒な時代である。自分の注意が完
壁であれば、それで安全かという、それがそうで
ないところが、全く持って不安なところである。数
年前のオウム事件を引用するまでもなく、近々では、
二、三百人の乗客をのせた全日空機において、一橋
大卒の航空ゲームマニアで、航空機に関するかなり
の知識を有した29才の男が、あろう事か操縦士を殺
し、自ら操縦棒を握ってあわや大惨事という「事件」
や、下関の駅で、35歳の九大工学部出身で、一級建
築士の資格すら持っている男が、仕事が見つから
なくてむしゃくしゃしたので、全く、唯の通り会わ
せただけの14人を殺傷した「事件」等がある。なか
んづく、東海村のJCOで起こった、原子力燃料の
精製過程中的のプロセスを簡略化すると言う、全く不
届きな中性子の臨界事件は、原子力の専門家が管理
する施設で生じた、その最たる「事件」であると言
えよう。私は此处でこれらの惨事を「事件」と書い
たのは、事故と明確に区別をしたかったからである。

<事故の因数分解>

事故はこれを因数分解すると、

事故＝(人間の間違いや失敗)×(機械の故障)
とかける。

つまり、此の意味するところは、前者か後者の何
れかが否(NO)なら事故は0となり、即ち、事故は
未然に防ぐことが出来る筈である。しかし、間違い
や失敗のない人間はいないし、故障しない機械等無
い以上、事故そのものは絶対、避けがたい。その確

率を、極力小さくするのが科学的態度だ。技術者は
じめ関係者は、「気」合いを入れて、事故の確率を
最小にする管理をしなければならないのは当然であ
る。ところが、前述の、3つの事件は、「事件」で
あって「事故」ではない事も、明らかである。即ち、
これらの事件は、人間の間違いでも、機械の故障か
ら生じたからでもないからである。それは、人間が
故意に機械に関わったからである。間違いなく、刑
事「事件」であると言っていい。現代の物騒さは、
実は此处にある。機械が、コンピュータ化され、そ
の入力も、従来より余計に人間が関与する機会は、
寧ろ増大する一方なのに、当の人間が脆くも壊れて
しまっているのだ。此处に及んで、人間の信頼度
を飛躍的に挙げない以上、日本に於けるこの種の
「事件」は、今後、更に増加すると予言する。

<何処が間違ったのか>

また、これらの事件が、高学歴や、高度の経験を
有する人々によって、ひき起こされている事も非常
に気になる。即ち、GNP (GDP)は、現在でも世界
第2位を誇りながら、義務教育や高校では、鯨詰
め教育を強制し、高校入試に見られるように、情緒
科目を軽視してきた弊害が、この辺で出て来たの
ではないのか。また、過去、大学で必ず受けた、人間
形成に不可欠な教養過程すら大きく省かれて、より
早くから専門的知識のみが詰め込まれる。これをま
た、近年、文部省も、薦めて来たようである。この
様に、産業への貢献を第一に置いた人造りを最優先
してきた。これは、長銀へは、4兆5千万円もの穴